吉田健一著作集

XXVII

# 時間

# 昔話

集英社

吉田健一著作集　第二十七巻
時間　昔話
昭和五十五年十一月二十日　第一刷印刷
昭和五十五年十二月四日　第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
© 1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171027-3041　落丁本・乱丁本はおとりかえします

# 吉田健一著作集　第二十七巻　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

時間　五
昔話　二〇一
解題　三九五

# 時間

# I

冬の朝が晴れてゐれば起きて木の枝の枯れ葉が朝日といふ水のやうに流れるものに洗はれてゐるのを見てゐるうちに時間がたつて行く。どの位の時間がたつかといふのでなくてただ確實にたつて行くので長いのでも短いのでもなくてそれが時間といふものなのである。それをのどかと見るならばのどかなのは春に限らなくて春は寧ろ樹液の匂ひのやうに騷々しい。そして騷々しいといふのはその印象があるうちは時間がたつのに氣付かずにゐることで逆に時間の觀念が失はれてゐるから騷々しい感じがするのだとも考へられる。例へば何か音がしてゐれば時計の音が聞えなくてその理由が解つてゐても聞える音の爲よりも時計の音が聞えないので落ち着かないといふこともあり得る。併し時計の音を擧げるのも必ずしも的確ではなくて時間がたつて行くのを刻々に感じる狀態にあるから、或は刻々の觀念も既になくて時間とともにあるから時計の音も聞えて來る。或はその音が聞いてゐる方に調子を合せる。

まだ時計のやうなものがなかつた頃の方が時間の觀念は正確だつたかも知れない。その秒針が動くのを見てゐて今と思つた瞬間に既にそれが過去といふ風な慌しい考へ、もつと嚴密には妄想も生じる

ので何が動いてゐるのでもその動きも時間のうちにある。それが時計の秒針でなくて水車小屋の水車ならばそのことを理解するのに困難はない筈で一秒、二秒と數へるから今がもう今でない感じにもなる。併し一秒前の針の位置が三秒前、四秒前のことになつてその四秒前が過去であると考へるのは物理的な所謂、時間が頭にあつてのことでそれならば過去、現在の區別も全く物理的なものになり、その拘束を離れるならば水車はいつまでも、或は今が今である意識が續いてゐる限り同じ眺めの中で廻つてゐる。その上の空では鳥が舞つてゐるかも知れなくてその鳥は空の或る位置にゐたのが次の瞬間には別な所に移つてゐるのでなくて空に舞つてゐるのである。それは水が流れてゐるのと變ることはない。

かういふ風に考へたらばどうだらうかと思ふ。我々が次元といふものの觀念を得るのにこれを一つの平面に見立てることが普通に行はれてその平面に直角に交るのが二次元、更にその兩方に直角に交るのが三次元でその三つともに對して直角にといふことになれば平面の觀念は既に役に立たなくてどの平面も他の平面に對して直角とする頭の操作を進めて行けば三次元の立方體がその立方體であることを變へずに移動する場合を一つの觀念に盛り込まなければならなくてかうして四次元が得られる。尤もそれも物理的な時間であることを免れないが時間の觀念が粗雜な雛形でならばそこにあつて更にそれが時間は凡てを運んで行くものといふ一般の考へを修正する。これは何が何を運んで行くといふのだらうか。今用ゐた比喩でも四次元は三次元を含むもので四次元が三次元を運ぶのでは意味をなさない。或は時間が人間を老いさせるのでなくてその老いる人間も老いた人間も時間なのである。

併し我々は時間がたつて行くと言ふ。それは我々も我々の周圍もそれだけではいつも同じでただ時



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間がそれを變へるのだといふ印象を與へるが我々が時間とともにあると正當に呼べる狀態にあり、我我のうちにも時間があつてそれが殆ど我々をなしてゐるものの凡てと思へる際にその狀態を檢するならば時間がたつて行くのでなくて我々が或る場所、現にゐるその場所にゐるのを感じる。又それが時間がたつて行くことなので我々が急いで何かしてゐて時計を見て急いでも間に合はない氣がするといふやうなのはその早さで時間がたつといふことでなくて我々の方で時間の觀念を失つてゐてそのことに脅かされるのである。それが時間がないといふことの意味であつて我々は事實さういふ際に時間がないことを望むといふ理窟に合はないことをする。それを望むのも時間とともになのであるが自分がしてゐることがすむまでとそれから後といふ風に時間を區切ることでその狀態にあるその人間にとつて時間はない。

從つて我々は一生のうちで多くの時間に亙つて時間がなくてゐる。そしてそれは一心不亂に何かしてゐる間でなくて却つて時間のことが念頭にあつてどういふ理由からでもその流れに自分を任せることが受け入れられないことによつてでその爲に若いうちは時間の觀念を正確に掴むことが稀である。それは時間がたつことでしか得られないことを若ければ今直ぐ自分のものにしたいからで凡て身に付けるのが望ましいことがその中に入る。それが時間がたつだけで得られるものでないことは勿論であつても努力することも時間のうちで行はれて時間がたつ一形式であつてそれがたつた後のことを時間がたつてゐるうちに望むのであるから焦躁や悔恨が若いうちは日常のことであるのも理解出來る。又それは出來ても時間がたつことが若いうちは無視され勝ちでなければ呪詛の種であることに變りはなくてその七轉八倒のうちに人間は育つて行く。併しここでは無視されてゐるのでも呪はれてゐるので

もなくて我々とともにある時間の話をしてゐる。

それ故に時間がたつといふのよりも凡ては動くといふギリシヤ風の言ひ方がここでは寧ろ適當であるかも知れない。その動くものはそれが出來る條件の下にあつて動くのでなくて條件と他のものを區別することもなくて何もかもが動いてゐるのであり、それはそれならば動きよりも更に嚴密には變化とするべきであるとも考へられる。凡ては刻々に變化してゐる。併しそのことに變化はなくて我々が時間を正確に、或はそれが時間を對象にであるから親密に意識するに至つてただ自分がゐる場所にゐるのを感じるのはこの不變のものに眼を向けるからかも知れない。又この感覺が生じるのは變化が反復でもあるからかとも見られて朝日も刻々に變化して行つてその持續があつて再び朝日が差し、我々は朝になつたことに氣が付く。併し我々がその時にそれまでに來た朝のことを思ひ出してゐるだらうか。それは朝である點でそれまでの朝と變りはなくても朝日とともに我々も變化し、習熟するといふことをする。それが反復といふことの意味である。

これは我々にとつて時間であるものの一部しか物理的な時間からは窺へないといふことでもある。我々に時計の音が時間がたつて行くのを知らせるのでなくて寧ろそれは我々が確かに今ここに自分がゐることを認める狀態にある際の伴奏であり、それがなくても少しも構はないことは言ふまでもない。もしそれが聞えて來ても邪魔ではなくて伴奏になるといふのである。そしてそのことからも物理的な時間と時間そのものの違ひは明かであつて時計は物理的な時間を計る器具であるが我々人間の世界をなしてゐる多種多樣なものの犇き、複合、或は流れでは時計が知らせる時間は他のものと同等に我々を廻る與件に加へられてゐてその流れである時間からすれば時計が動くのは水車の回轉と單に物質の

上でしか違つてゐないと見ることが許される。それ故に一般に考へられてゐることと反對に我々は時計で時間を知ることは出來ない。その時計の時間は機械的に時計の針の進行を我々に告げるだけで朝の十時は時間の流れでの我々の狀態によつてどういふことにでもなり得る。

それを思へばなほ更のこと時計がなかつた頃の時間がそれだけ現實のものに感じられて來る。我々が時計を見て朝の十時であるのを知るのは用向きの上での意味しか持たないが光線の具合で朝であると感じるのは我々が朝の世界にゐるのを認めることで朝の十時であるのはそれを知るもの次第であつても朝であるのは世界が朝なのである。又それが夜であつても晝であつてもこのことに變りはない。それは時間の、それもその刻々の流れが世界に招來するさうした狀態で時計の針だけでなくて鳥獸、草木、氣壓その他この世にあるものの凡ての動き、經過、推移がその流れをなしてゐる。又朝といふやうなのは總稱であつて朝になれば山川草木がその狀態にあるのであり、それが人間であつても生物である限りその變化を受けることは免れない。これは我々の體が我々よりも先に知つてゐることでこの流れの外に出る時に我々は死ぬ。それ故にこれは我々が生きてゐる感覺とも繫つてゐて夜が明ければ我々は朝になつたと思ふ。

この時間が我々とともにあるもの、或はそれとともにあることを我々が願ふものである。又人間が時間の觀念を得るに至つたのもこの時間を通してその觀念だつたので時間に追はれたり時間が不足したりするのは時間の流れを無視して自分の力を驗すことを覺えてからのことだつた。我々が若いうちに幾度でも繰り返したことである。そして何かするのに未熟であつて手間を掛けるのは言はば必要惡に過ぎなくても人間が同じく時間の流れのうちにあるものを選んでこれを取り込むといふことをした

のは無益だつたのでなくてそれは時間とともにあつてそれを現在と意識するのと別な意味で人間に自分が或る所に立つてゐることを確認させて來た。ロスがマラリアの病原菌を發見した時、司馬遷が史記を書き上げた時がさうだつたに違ひない。その瞬間に時間の流れが止つたと思はれるのと反對にそれまで忘れられてゐたその流れが現に流れてゐると知れてそれがその瞬間だつたのである。或は長い一生を何をするのにでも過して時間のことは考へないでゐてもその瞬間は訪れる。

併し寢食を忘れてといふのは嘘に決つてゐる。寧ろ有效に仕事をする爲にもその仕事も終りに近づけて行く時間に氣付かずにはゐない筈であつてそのことを示す材料にもこと缺かない。西田幾多郎は「善の研究」で現在といふものを說明してピアノに熟練したものがピアノを彈いてゐる時と同じく熟練した登山家が山を登つてゐる時のことを擧げてゐる。何れも時間、呼吸、拍子を無視しては出來ないことであつてこれは時間が人間の意識の上でもその人間と一體になつた典型的な例である。併しさうして意識してのことが必ずしも現在に就てであることはなくて北齋が百まで生き延びたらばいい繪が書けるだらうと言つたのは別に命が短いといふ風な意味でなかつたに違ひなくて寧ろそれまでの年月を振り返つて後何十年といふ時間を頭に浮べてのことだつたのが想像される。そこに焦りはなくてそれが既に名人の境地だつたことはさうでなくてそのやうなことが口に出來るものでないことで解る。

さういふこととは別に正當に時間といふものを意識した例が一つ記憶に殘つてゐる。我が國と中共の復交が實現に向つてゐた時に我が國駐劄の或る中華民國系の老外交官に臺灣の本土復歸はいつ頃のことだらうかと誰かが聞いた所がその人が後七十年もたてばと答へたといふのである。これはその人の餘命からすればその死後何十年かといふことで時間の觀念に狂ひがないならば自分がいつか死ぬこ

とも當然その觀念のうちにあることであるから自分の死を越える時間の長さを言ふ場合に自分のことを考慮することはない。もしそのことに拘泥するならば自分が生きてゐるうちはとてもといふ返事になつた筈である。支那ならばかういふ人間がゐることも解る。これは日本よりも歴史が長い國であるのみならずその歴史は支那の文明のものである。それが漢詩にもあつて支那人がかういふ詩をどのやうな風に讀むのか想像も付かないが我々に最も強い印象を殘すものの一つはそこにある時間であつてそれには詩が追懷の形を取る必要もなくて詩人が河を眺めてゐるだけで時間がたつて行く。

我々はさういふ民族に接してのん氣だと言ふ。併しそれと同時に我々は卑下することも好むやうであつて日本人はあくせくするとも言ふ。併しのん氣でもあくせくでもなくて大事なのは時間が誰にとつても時間であることである筈でそれで時間にこれまで見て來た通り二種類あるのを區別する必要が生じる。この頃目に付くどこかの時計の廣告に土曜と日曜は時計と緣を切つてゆつくりといふのがあつて最近の時計は日付け、或は何曜日といふことも盤に出るから時計が間違ひなく動いてゐれば月曜の朝になつて時計を取り上げて月曜の朝の何時何分といふことも解る譯である。併し時計と緣を切るのが時間ともであるならば土曜の晩から月曜の朝までどのやうな具合に時間を過すのだらうか。その時間がなくては息をすることも出來ない。併し時計の時間を時間と思つてゐれば何時であるか解らなくなることでそこに出現するのがただの空白であつてさういふ顏をした人間もこの頃は見掛ける。

さう言へば意識的に少くとも時間を無視、或は度外視した現象に我々は度々付き合させられるやうになつた。例へば外國には名畫といふものがあるといふことでそれが日本に持つて來られてそれを見に人が集る。又それを見たからその名畫を見て來たことにもなるのだらうが名畫でも駄作でも繪とい

ふのもただそれを自分の網膜に映すだけでその繪を見たことにならない。その前にその繪でなくても繪といふものに馴れなければならなくて更に嚴密にはこれは個人だけの話でなくてその個人が屬してゐる人間の集團がさういふ繪を愛好する傳統が出來てゐなければ個人の眼を周圍から訓練するといふ條件が缺けることになる。宗達の鳥が空を飛んでゐる繪を外國人が見てその繪で形が書いてあるのはその鳥だけだつたからそこを切り取つて持つて歸つたといふ話がその邊の事情を示してかういふ不用意も時間の流れの外に出ることの一種でそれをする人間はその時死んでゐる。或は少くともその時生きてゐるのはその人間の體だけである。

この後で海外旅行のことを例に擧げる必要があるだらうか。それよりも更に手近な所でこの頃の我我は本を讀むにも時間の短縮を考へて解說を望み、それが時計の時間で早く讀みたいからであつても夜が明けて朝になり、日が暮れて夜が來る時間が本を讀むのにもなくてはならないものであることが全く頭にないことはかうして時計の時間を惜むことでも解る。我々が本を讀むのもその言葉を通して時間とともにあり、時間に遊ぶ爲であつてこれが凡てなのでその爲に必要な物理的な時間が長いか短いかは本を讀む上で計算の對象になることでない。兎に角それが短くしたくて解說を讀んですませるのが本を讀むことでないことだけは確かである。そしてそこにさうした時間の短縮を望むことの矛盾があつて時計の針で凡てをなるべく早く片付けようといふのがそれで更に他のことをするのが目的であつても時間の觀念をなくしてゐることは或ることをするといふことのその仕方も知らずにゐることで凡てを片付けた後でどういふことも出來る譯がない。それでその上で始めたこともなるべく早く片付けることになる。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com